

厚生労働行政推進調査事業費補助金  
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス政策研究事業)

分担研究報告書

若年者を対象とした効果的な薬物乱用予防に係る広報戦略の策定に関する研究

研究分担者：河井孝仁  
(東海大学文化社会学部広報メディア学科)

## 研究要旨

行政機関が効果的な薬物乱用の予防啓発活動を企画・実施するために、地域の多様な団体及び市民と連携しつつ、どのように広義のメディアを活用することが望ましいかについて分析する。

今年度においては、Webアンケート及びフォーカスグループインタビューを行い、大麻乱用への許容度の違いによる、メディア利用状況や身近な人々からの影響度の相違などを明らかにすることで、行政の相談機関の意義や対応方法について検討した。

さらに、従来の「ダメ。ゼッタイ」キャンペーン等を中心とする大麻乱用防止広報についての課題を確認することをめざした。

### A. 研究目的

本分担研究では、大麻に関する科学的知見や、特徴的な取り組みを行っている国・地域における規制・実態・広報手法などの継続的な情報収集に基づき、行政機関が地域の多様な団体及び市民と連携しつつ、若年者に向けた効果的な薬物乱用の予防啓発活動を企画・実施するために、広義のメディアをどのように活用することが望ましいかについて分析することを目的とする。さらに、当該分析に基づき、行政機関等が利用しやすいガイドブックの作成を目指すものとする。

分析のためのフレームワークとして、AIDA・AIDMA・AISAS・SIPSなどの消費者行動変容に係る記述モデルを戦略モデル化した「メディア活用戦略モデル」を用いる。

今年度は、メディア活用戦略モデルを基礎に、主な意識変容対象である、大麻乱用への許容度の高い層の、現状における意識、メディア活用状況、情報へのコンタクトポイント等の明確化を目的とした。

あわせて、従来から積極的に行われている大麻乱用防止広報である「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンの現状における評価を行うことを目指した。

### B. 研究方法

#### ①若年者向け大麻乱用防止に係るアンケート

2021年7月に、NTTコム・オンライン・マーケティング・ソリューション株式会社に委託し、全国の18歳から29歳の若年者(年齢平均23.7歳)540名を対象にWebアンケートを行った。(このアンケートを以下「アンケート1」とする。)

また、2022年2月には、株式会社サーベイリサーチセンターへの委託により、後述するフォーカスグループインタビューによる仮説を疎明するために全国の20歳～29歳を対象に800人をサンプルとしてアンケートを行った(このアンケートを以下「アンケート2」とする。)

#### ②学生及び若年社会をインタビューイとするグループインタビュー

2022年2月に、株式会社サーベイリサーチセンターへの委託により、論者がコーディネーターとなって、若年当事者の意識を確認し、若年者がどのようなソーシャルメディア活用を行っているか等について確認するために、グループインタビューを行った。インタビューは2回に分けて行い、1回は20歳から22歳の学生6名(男性3名・女性3名)をインタビューイとし、もう1回は22歳から27歳の若年就業者6名(男性3名・女性3名)をインタビューイとして行った。

### C. 研究結果・考察

#### 1. 若年者向け大麻乱用防止に係るアンケート

当該アンケート結果のうち、重要と考える知見は以下の通りである。

アンケート1における「嗜好品(楽しみ)として大麻を使うことは認められるべきだと思いますか。」との設問に対し、「強くそう思う」「まあそう思う」と回答したものは、回答者500名のうち92名、17.1%あり、嗜好品としての大麻利用に否定的ではない層が相当程度存在することが確認できた。

	許容度	人数	%
強くそう思う	2	28	5.2
まあそう思う		64	11.9
(強く+まあ) そう思う		92	17.1
あまりそう思わない	1	148	27.4
まったくそう思わない	0	300	55.6

そのうえで、上記の「強くそう思う」「まあそう思う」を許容度2とし、「あまりそう思わない」を許容度1、「まったくそう思わない」を許容度0としたときに、嗜好品としての大麻利用への許容度と、一方で、上記の大麻使用への許容度と、日常的な不安意識がどのように関わるかを確認した。

自分は日常において不安は強いほうだと思いますか。				
許容度	強くそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
2	45	35	11	1
	48.9%	38.0%	12.0%	1.1%
1	28	72	44	4
	18.9%	48.6%	29.7%	2.7%
0	73	136	66	25
	24.3%	45.3%	22.0%	8.3%

ここからは、嗜好品としての大麻利用に許容度の高い、言い換えれば乱用へのハードルが低い者が日常において強い不安を持っていることが確認できる。敷衍すれば、日常的な不安の解消が大麻許容度を低下させる可能性が高いとも考えられる。

そこで、不安解消にとって他者からのアドバイスが有効であると考えた場合、嗜好品としての大麻利用に許容度の高い者が友人からのアドバイスを重視しているかを確認した。

親しい友人からのアドバイスを、大事にするほうだと思いますか				
許容度	強くそう思う	まあそう思う	あまりそう思わない	まったくそう思わない
2	28	42	19	3
	30.4%	45.7%	20.7%	3.3%
1	9	87	42	10
	6.1%	58.8%	28.4%	6.8%
0	45	173	59	23
	15.0%	57.7%	19.7%	7.7%

大麻乱用へのハードルが低いと考えられる者が、友人からのアドバイスを重視していることは、情報経路として興味深い。

また、若年者の情報経路としてSNSの有効性についても確認する必要がある。特に、嗜好品としての大麻利用に許容度の高い者に影響力のある存在を発見することは、重要な意義を持つと考える。

そのため、YouTuberがどのような影響力を持ちうるかについて確認した。YouTuberについて「気晴らしや暇つぶし的手段」「情報収集の手段」「頼りになる存在」「応援する存在」「どれにもあてはまらない」について複数回答を可能として答えを求めた。

	気晴らし	情報収集	頼りになる	応援する	その他
2	58.2%	58.2%	23.9%	19.4%	6.0%
1	89.4%	42.4%	12.9%	35.3%	0.0%
0	81.0%	34.8%	10.8%	34.2%	2.5%

この結果からは、大麻乱用へのハードルが低い者にとって、YouTuberが「頼りになる存在」として相対的に意義を持つことが確認できる。

続いて、大麻乱用防止広報として行われてきた「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンについて検討する。

まず「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンが、情報受信者にとって、どのような意識を醸成しているかについて確認することとした。

そのために、いくつかの項目に分け「『ダメ。ゼッタイ。』という標語を聞いて、どのように思いましたか。それぞれの項目について、『強く、そう思った』『まあ、そう思った』『あまり、そうは思わなかった』『まったく、そうは思わなかった』のいずれかを選んでください。」との設問を行った。

まず、大麻の危険性の認知にどの程度の影響力を持っているかについて検討するため「大麻はとても危険である」との意識醸成について確認した。その結果、477人の回答者のうち250人、52%が「強くそう思った」と回答し、「あまり。そうは思わなかった」「まったくそうは思わなかった」とする者は4人9%となった。「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンが大麻乱用の危険性認知に一定の意義を持っていることがわかる。

この回答を嗜好品としての大麻利用の許容度別に検討すると以下ようになる。

許容度	強くそう思った	まあそう思った	あまりそう思わなかった	まったくそう思わなかった
2	32	30	11	4
	41.6%	39.0%	14.3%	5.2%
1	33	73	18	4
	25.8%	57.0%	14.1%	3.1%
0	185	80	5	2
	68.0%	29.4%	1.8%	0.7%

ここからは、許容度が高い者にとっては、相対的に危険性の認知が不十分であるとも考えられるが、それでも許容度2の者でも40%を超える者が強く危険であると思っているとも評価できる。言い換えれば、危険性の認知が必ずしも、嗜好品としての利用へのハードルを高めることにつながっていない可能性が見られる。

さらに直截に「自分は大麻を嗜好品として使用しないようにしよう」との意識醸成について確認する。

許容度	強くそう思った	まあそう思った	あまりそうは思わなかった	まったくそうは思わなかった
2	28 36.4%	36 46.8%	10 13.0%	3 3.9%
1	52 40.6%	65 50.8%	10 7.8%	1 0.8%
0	204 75.0%	60 22.1%	5 1.8%	3 1.1%

以上からは、嗜好品としての大麻利用の許容度のきわめて低い者にとっては、「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンが危険度の訴求に強い有効性を持ち、嗜好品としての大麻使用への忌避感を高めていることがわかるが、大麻乱用のハードルが低い者には相対的に危険度の訴求に弱さが見られ、大麻使用への忌避感醸成にも十分には役立っていない部分があることがわかる。

言い換えれば、「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンを補完し、多様な手段で大麻乱用の危険性を十分に伝えることができれば、乱用へのハードルを高くすることができることも評価できる。

一方で、「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンは本来、未然防止を目的とする者であり、乱用経験「者」への否定的感情を醸成しようとするものではないにも関わらず、当該キャンペーンが乱用経験者の立ち直りを妨げているとの議論について確認する。

この点を確認するために、「A. 犯罪を行って、刑罰を受けた人とは付き合わないようにしようと思いますか。」と、「B. 大麻を使用して刑罰を受けた人とは付き合わないようにしようと思いますか」との回答を比較する。

	強くそう思った	まあ、そう思った	あまり、そうは思わなかった	まったくそうは思わなかった
A	154 28.5%	272 50.4%	88 16.3%	26 4.8%
B	235 49.3%	178 37.3%	48 10.1%	16 3.4%

ここからは、一般的な犯罪に比べ、大麻使用に係って罪を犯した者への忌避感が伺われる。

さらに、「ダメ。ゼッタイ。」という標語を聞いて、大麻を嗜好品として使った人はもう立ち直れないと思ったかについても以下のような回答が得られている。

強くそう思った	まあ、そう思った	あまり、そうは思わなかった	まったくそうは思わなかった
198 41.5%	179 37.5%	83 17.4%	17 3.6%

以上から、大麻に係る「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンについては、乱用経験者の立ち直りを支援することへのさらなる留意が求められている可能性も考えられる。

続いてアンケート2についての分析を行う。

アンケート2では、アンケート1から得られた

「大麻乱用へのハードルが低い者に不安が強いものが多い」という知見から、相談相手や相談機関の利用を中心に調査を行った。

なお、アンケート2については2020年度のアンケート及びアンケート1に比べ、大麻乱用への許容度が高いものが比率として半数程度にとどまっている。この点は、今後再確認する必要がある。

そのうえで、許容度別に専門家相談窓口の利用意向について確認する。

アンケート2において「あなたが、なかなか解決できない困ったことが起きたときに、行政や専門家組織による相談窓口を利用したいと思いますか。」との設問への回答を、アンケート1同様の基準で許容度別に確認する。

許容度	強くそう思った	まあそう思った	あまりそうは思わなかった	まったくそうは思わなかった
2	8 12.5%	27 42.2%	17 26.6%	12 18.8%
1	11 5.9%	77 41.4%	70 37.6%	28 15.1%
0	45 8.2%	178 32.4%	194 35.3%	133 24.2%

ここからは、大麻乱用への許容度が高い者は相対的に、専門家窓口の利用意向が高いことが認められ、情報提供による専門家相談窓口への誘導に有効性があると考えられる。

また、「あなたは、不安がとても強いときに、誰かに相談しますか。相談すると思う人を以下の中からお答えください。」との設問について、相談先として多いものは大麻乱用への許容度の違いに関わらず、最も多いものが母親であり、続いて友人となっている。一方で行政の相談窓口や専門機関の相談窓口を回答するものは2%から6%程度にとどまっている。（複数回答）

許容度	母親	友人	行政相談窓口	専門機関の相談窓口
2	34 54.8%	21 33.9%	4 6.5%	3 4.8%
1	94 59.9%	53 33.8%	6 3.8%	4 2.5%
0	314 62.3%	147 29.2%	25 5.0%	18 3.6%

先に述べたように、専門家相談窓口の利用意向がある程度存在する一方で、複数選択の相談先としては十分に想起されていない状況が確認できる。

一方で、母親や友人が第一次的な相談先として意義を持つのであれば、こうした第一次的相談窓口から、専門機関等の相談窓口への誘導という経路があり得る。

それでは、友人は誘導元としての機能を果たしえるだろうか。

アンケート2において「友人が明らかに不安に思っている様子であったときに、あなたは相談に乗る旨の声をかけると思いますか。」との問に対して、以下の回答が得られている。

とても思う	247	30.9%
まあ思う	382	47.8%
あまり思わない	98	12.3%
まったく思わない	73	9.1%

さらに、「友人の相談内容が深刻で、自らの力では支援できないと思ったときにどうしますか。」への回答は以下となっている。

共感することしかできない	342	42.8%
いろいろと調べてアドバイスするように心がける	413	51.6%
家族など身近な人への相談をすすめる	215	26.9%
どこか専門的に相談できる場所を探して紹介する	245	30.6%
知り合いの医師や専門家を紹介する	73	9.1%
その他	13	1.6%

上記2つのアンケート結果からは、友人という存在は、大麻乱用へのハードルの低い者にとって、相談に乗ってくれる存在となり得ること、また、友人を第一次相談先として、専門相談機関への誘導元となり得ることが確認できた。

#### D. 結論

研究2年度目にあたる2021年度においては、中間的な結論にとどまるものの、大麻利用について若年者の忌避感はずしも高いものではないこと、そうした大麻乱用へのハードルの低い者には日常的な不安が強いこと、相談機関の利用については十分に誘導可能であること的前提の上に、友人という第一次相談先を十分に活用することの有効性を確認できた。

また、「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンが大麻乱用の危険性の認知獲得に有効であり、大麻乱用の防止にも相当程度の意義を持っていることが確認できた。その一方で「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンが適切に運用されない場合、大麻乱用経験者の立ち直りにとって否定的な影響を与える可能性にも着目できたと考える。

ここからは、「ダメ。ゼッタイ。」キャンペーンの

本来の意義も踏まえ、若年者に対し、友人に大麻乱用をさせないことを目的として働きかける取り組みを重視していくことが必要であると考えられる。

本項冒頭において述べたように、本年度における研究成果としては中間的な結論にとどまるが、大枠としての方向性は確認できたと考える。次年度以降に、この方向性を十分に鍛え、詳細化していくことが求められるだろう。

#### E. 参考文献

内田美宇「現代社会における薬物乱用とその対策について」(2015)

[http://www.shigakukan.ac.jp/information/upload/report2015\\_04.pdf](http://www.shigakukan.ac.jp/information/upload/report2015_04.pdf)

河井孝仁『シティプロモーションでまちを変える』彩流社(2016)

北 浩樹, 伊藤 千裕, 木内 喜孝「大学と学生の大麻情勢—大麻リスクとその対策—」『東北大学高度教養教育・学生支援機構紀要』第6巻, p193-204 (2020)

警察庁違法大麻撲滅キャンペーン「I'm CLEAN—なくす やめる とおざける—」

[https://www.npa.go.jp/bureau/sosikihanzai/yakubutujoyuki/illegal\\_cannabis/](https://www.npa.go.jp/bureau/sosikihanzai/yakubutujoyuki/illegal_cannabis/)

村上勲, 齋藤百枝美, 渡辺茂和, 土屋雅勇「薬物乱用防止に関する薬学部1年生の意識変化」『薬学教育』第2巻 (2018)

薬物乱用者の手記\_神奈川県 (厚生労働省から)

<https://www.pref.kanagawa.jp/docs/n3x/yakumu/yakutai/cnt/note.html>

薬物乱用防止のための基礎知識\_麻薬・覚せい剤乱用防止センター

<http://www.dapc.or.jp/kiso/index.html>

#### G. 研究発表

なし

#### H. 知的財産権の出願・登録状況

なし